

国際政治経済 I

- ・レジュメ及び自筆ノートの持ち込みを許可
- ・期末試験（80点）＋小テスト（10点）＋出席点（10点）で評価

I. 経済を巡る国家間の政治的対立が発生するのはなぜか、説明せよ。続いて、対立を解消して国家間で協調することが、なぜ経済的には望ましいと考えられるのかを説明せよ。

講評

前半 10 点、後半 15 点、計 25 点である。全般的に良く理解されていた。前半は、政治的観点からは、協調をもたらす世界全体での経済的厚生を増大よりも一国単位でのそれを優先し、国際経済活動に介入することが正当化され得ることの理由として、授業中に挙げた事項が一つでも適切に指摘されていれば正解とした。後半については、少なくとも比較優位の原理について簡単に言及した上で、国家間の協調（自由貿易）を実現することが世界全体の経済的厚生を増大させ、経済的観点からは望ましいと言えるということを説明する必要がある。

II. リアリズム、リベラリズム、コンストラクティビズムの各理論において、協調／平和はどのような方法により実現し得ると考えられるか、理論ごとに説明せよ。

講評

リアリズムについて 8 点、リベラリズムについて 10 点、コンストラクティビズムについて 7 点、計 25 点である。リアリズムとリベラリズムについては、理論の特質を問う小テストを授業中に実施したこともあり、概して適切な理解がなされていた。ただし、今般の問いは、理論の特質一般ではなく、協調／平和を実現し得る方法に関する説明を求めていることから、この点に焦点を当てず、小テスト時と同様に両理論の概説を提示しただけの回答は大きく減点とした。リアリズムについては、協調／平和は実現し得ないとの主張であるとの回答だけでは不十分であり、覇権安定論等において一定の国際構造の下では協調／平和が実現すると主張されている点にも言及すべきである。リベラリズムについては、協調／平和を実現するための主たる手段と考えられるものとして授業中に挙げた、経済的相互依存と国際制度の両者に言及する必要がある。一方についてのみ説明されている場合や、各手段が協調／平和をもたらすメカニズムを説明していない場合は、大きく減点とした。コンストラクティビズムについては、観念（アイデア）や規範がいかなる役割を果たすと考えられているかを説明する必要がある。

III. 第一次世界大戦の開戦（開戦に至る期間を含む。）から第二次世界大戦の終戦までの間で、政治と経済の相互作用が生じている事例を一つ取り上げ、いかなる相互作用が見られるかを説明せよ。その上で、当該相互作用を最も良く説明できるのは、リアリズム、リベラリズム、世界システム論（従属論）、コンストラクティビズムのいずれであると考えるかを、根拠を示して述べよ。

講評

前半 15 点、後半 15 点、計 30 点である。前半については、授業時に説明した事例を取り上げた回答が大半であったが、それ以外の事例を取り上げても問題ない。ただし、事例に全く言及していないもの、時期を外した事例（冷戦等）や一国内で完結している事例を取り上げているもの、政治と経済の相互作用が生じていない事例となっているものは採点対象とし得ない。また、どのような点に相互作用を認めるかを説明していない場合も、大幅に減点とした。後半については、取り上げる理論自体をもって適否を判断することはせず、根拠の妥当性に基づいて評価した。なお、根拠が提示されていない場合は、後半部は採点対象としない。